

4月 新着図書

おひとり2冊まで、2週間（新着本は1冊）借りられます。



日野南コミュニティーハウス

ブラックボックス



著者名：砂川文次

ずっと遠くに行きたかった。今も行きたいと思っている。自分の中の怒りの爆発を、なぜ止められないのだろう。自転車便のメッセンジャー、サクマは都内を今日もひた走る。第166回芥川賞受賞。



塞王の楯



著者名：今村翔吾

幼い頃、落城によって家族を喪った石工の匠介。彼は「絶対に破られない石垣」を造れば、世から戦を無くせると考えていた。一方、戦で父を喪った鉄砲職人の彦九郎は「どんな城も落とす砲」で人を殺し、その恐怖を天下に知らしめれば、戦をする者はいなくなると考えていた。秀吉が死に、戦乱の気配が近づく中、琵琶湖畔にある大津城の城主・京極高次は、匠介に石垣造りを頼む。攻め手の石田三成は、彦九郎に鉄砲作りを依頼した。大軍に囲まれ絶体絶命の大津城を舞台に、信念をかけた職人の対決が幕を開ける。ぶつかり合う、矛楯した想い。答えは戦火の果てに一。「最強の楯」と「至高の矛」の対決を描く、圧倒的戦国小説！

黒牢城



著者名：米澤穂信

「おぬしならばこの曲事を解ける」本能寺の変より四年前、天正六年の冬。織田信長に叛旗を翻して有岡城に立て籠った荒木村重は、城内で起きる難事件に翻弄される。動揺する人心を落ち着かせるため、村重は、土牢の囚人にして織田方の軍師・黒田官兵衛に謎を解くよう求めた。事件の裏には何が潜むのか。戦と推理の果てに村重は、官兵衛は何を企む。

赤と青とエスキース



著者名：青山美智子

メルボルンの若手画家が描いた一枚の「絵画」。日本へ渡って三十数年、その絵画は「ふたり」の間に奇跡を紡いでいく。一枚の「絵画」をめぐる、五つの「愛」の物語。彼らの想いが繋がる時、驚くべき真実が現れる！仕掛けに満ちた傑作連作短篇。



硝子の塔の殺人



著者名：知念実希人

雪深き森で、燦然と輝く硝子の塔。ミステリを愛する大富豪の呼びかけで、一癖も二癖もあるゲストたちが招かれた。この館で次々と惨劇が起こる。謎を追うのは名探偵と医師。

残月記



著者名：小田雅久仁

近未来の日本、悪名高き独裁政治下。世を震撼させている感染症「月昂」に言われた男の宿命と、その傍らでひっそりと生きる女との一途な愛を描ききった表題作ほか、二作収録。「月」をモチーフに、著者の底知れぬ想像力が構築した異世界。足を踏み入れたら最後、イメージの渦に？み込まれ、もう現実には戻れない——。最も新刊が待たれた作家、飛躍の一作！

スモールワールズ



著者名：一穂ミチ

ままならない現実を抱えて生きる人たちの6つの物語。夫婦円満を装う主婦と、家庭に恵まれない少年。「秘密」を抱えて出戻ってきた姉とふたたび暮らす高校生の弟。初孫の誕生に喜び祖母と娘家族。人知れず手紙を交わしつつける男と女。向き合うことができなかつた父と子。大切なことを言えないまま別れてしまった先輩と後輩。誰かの悲しみに寄り添いながら、愛おしい喜怒哀楽を描き尽くす連作集。第74回日本推理作家協会賞短編部門候補作「ピクニック」収録。

正欲



著者名：朝井リョウ

あつてはならない感情なんて、この世にない。それはつまり、いてはいけない人間なんて、この世にいないということだ。息子が不登校になった検事・啓喜。初めての恋に気づいた女子大生・八重子。ひとつの秘密を抱える契約社員・夏月。ある人物の事故死をきっかけに、それぞれの人生が重なり合う。しかしその繋がりには、「多様性を尊重する時代」にとって、ひどく不都合なものだった——。「自分が想像できる”多様性”だけ礼賛して、秩序整えた気になって、そりゃ気持ちいいよな」これは共感を呼ぶ傑作か？ 目を背けたくなる問題作か？ 作家生活10周年記念作品・黒版。あなたの想像力の外側を行く、気迫の書下ろし長篇。

同志少女よ、敵を撃て



著者名：逢坂冬馬

1942年、独ソ戦のさなか、モスクワ近郊の村に住む狩りの名手セラフィマの暮らしは、ドイツ軍の襲撃により突如奪われる。母を殺され、復讐を誓った彼女は、女性狙撃小隊の一員となりスターリングラードの前線へ——。第11回アガサ・クリスティ賞大賞受賞作。

星を掬う



著者名：町田そのこ

「52ヘルツのグジラたち」で本屋大賞を受賞した町田その子注目の受賞後第一作。その期待に応えた証しのように、さまざまな新聞、雑誌で取り上げられている。過去を背負ってすれ違う母と娘の物語。結ばれた糸はしっかりとつながっていた。冬の長い夜にゆっくりと読んで、静かな深い余韻にひたっていただきたい。前作を越える高評価で、自らさらにハードルをあげた。

夜が明ける



著者名：西加奈子

思春期から33歳になるまでの男同士の友情と成長、そして変わりゆく日々を生きる奇跡。まだ光は見えない。それでも僕たちは、夜明けを求めて歩き出す。現代日本に確実に存在する貧困、虐待、過重労働——。「当事者でもない自分が、書いていいのか、作品にしているのか」という葛藤を抱えながら、社会の一員として、作家のエゴとして、全力で書き尽くした渾身の作品。

六人の嘘つきな大学生



著者名：浅倉秋成

嘘つき学生と、嘘つき企業の、意味のない情報交換——それが就活。成長著しいIT企業「スピラリンクス」の最終選考。最終に残った六人が内定に相应しい者を議論する中、六通の封筒が発見される。そこには六人それぞれの「罪」が告発されていた。犯人は誰か、究極の心理戦スタート。